Chapter 27 : **レックウザの三度目の生 Pt.1**

ウーラオスの教えによって以前よりも落ち着き、地に足がついてきたゼラオラは、道場の掃除をしていた。  
そのとき、竹林の奥で見覚えのある不気味な光を見つけた。  
苔と根の下に隠れて、またしても「TIMI TIMMY」の機械が微かに脈動していたのだ。  
ゼラオラの体毛が逆立ったのは、恐怖ではなく――本能だった。  
すぐさま彼はウーラオスのもとへと報告に向かった。

ウーラオスは無言で機械に近づいた。その存在感は静かだが重く、慎重なまなざしで異物を観察する。  
そして、ゼラオラの肩にしっかりとした前脚を置いて言った。

「これは、軽々しく触るものではない。ここに残せ。古の者に尋ねてみよう」

ゼラオラはうなずき、その場を離れた。かつて同じような装置が混乱を招いた記憶が、脳裏に蘇っていたからだ。

数日後、何の前触れもなく、一人の風変わりなAI技師がその竹林に現れた。  
白衣を着ているが、サイズが明らかに小さい。彼の名は――バリヤード。  
念力の手と、どこかうさんくさい笑みを浮かべながら、彼はその機械を軽々と宙に浮かせて言った。

「実に興味深いテクノロジーだ。型は古いが……最適化の余地がある！」

遠くからその様子を見ていたゼラオラは、胸に嫌な感覚を覚えた。  
バリヤードは慎重ではなかった。彼は――興奮していた。無謀だった。  
一つのミスが、ビリッ――機械が突如、データの奔流を吐き出し始めた。

ゼラオラはすぐさま踵を返し、ウーラオスに知らせるために駆け出した。  
その間にも、マシンの不安定なエネルギーが周囲の空間を歪ませ、脈動は心臓の鼓動のように荒れていた。

結局、バリヤードは寸前のところで機械を安定させ、レックウザの破滅的な復活を防いだ。  
自画自賛の笑みを浮かべて、彼はつぶやいた。

「破壊する必要などない……これは、マネタイズだ」

数ヶ月後――  
彼はその装置を奇怪なレックウザ型のギャンブルロボに改造していた。  
目は光り、腕はルートボール型。機械の声は不気味に語りかける。

「運試しするかい……それとも、地獄を見るかい？」

ピカチュウは運も金も尽きていた。  
仕方なく、清掃員兼、バリヤードの怪しげな副業の技術サポートとして働いていた。

子供たちがデジタルコインを次々と投入し、ランダムなコスメやジョーク武器を手に入れようとする様子を見て、ピカチュウは心の中で呻いた。

「こんなの、バカらしい……」  
そうぼやきながら、偽のポケチップを掃き集める。「……でも金にはなる」

ある日の午後、アブソルがアーケード屋台の前を通り過ぎた。口笛で穏やかな旋律を奏でていたが――その顔を見た瞬間、足が止まった。  
レックウザの頭部を模したロボットが、カチッと音を立ててこちらを振り向き、視線を合わせたのだ。

「もう一度回すかい、戦士よ……！」

アブソルはその場で凍りついた。  
過去のトラウマが、一気に押し寄せてくる。

「……やだ」  
目を見開いたまま彼は呟いた。「やだやだやだっ」  
そして冷や汗をかきながら、一目散に逃げ去っていった。

あのロボットは、かつてほど危険ではなかった。  
だが、その存在は今もなお、有害な余韻を残していた。  
とくに――運が悪い者、あるいは興味本位で近づいた者には。  
そのまばゆい罠に、再び絡め取られる者もいるのだった。